

感想文

五泉北中学校 3年 志田 伊織

8月5日に行った、平和記念資料館は、ずっしりとした重い空気が漂っていてそこにいる全員が、78年前に起こった悲劇を重く受けとめ、真剣な表情で展示物を見ていました。中には、涙を流す人もいました。私はまず、それに心打たれました。

人は、自分と一切関わったことのない人のことを想い、他人事として考えるのではなく自分事として考え、その上、涙を流すことまでできるのです。きっと、平和記念資料館を見た人は、二度とこんなことを起こしてはならないと思った人が多いのではないかと思います。私自身も、強くそう思いました。伝えていくことがどれだけ大切なことなのか、改めて実感しました。

平和記念資料館に行く前に、広島城を見学したのですが、その広島城も原爆で倒壊したらしく、当時は瓦礫の山と化していたそうです。その瓦礫の山にある木材を持って行って生活に役立てたと聞いて、驚きました。体と心に傷を負いながらも、精一杯生きるというのは、とても難しいことだと思うので、本当にすごいと思います。

8月6日に行われた、広島子ども平和の集いでは、全世界にある12,500発の核爆弾のうち、3,844発がすぐに使える原爆だということを知り、驚きました。自分の無知さを痛感し情けなく思いましたが、核兵器の現状を知れて良かったです。

梶本淑子さんがお話し下さった被爆体験講話は、資料館とはまた違った衝撃を受けました。まず、当時の日本についてのお話から始まりました。国が貧しくなり、何もかもが配給制度となって、食料は、いも、かぼちゃ、大豆、とうもろこしなどが配られたけれど量は少なく、栄養が足りず、病気になり亡くなった人が沢山いて、皆生きるのに必死だったそうです。そして、言論の自由が無くなり、戦争に反対すると非国民と言われ、拷問されるそうです。親が非国民の子どもは、酷いいじめに遭い、学校では、梶本さんが習うのを楽しみにしていた外国語も、敵国語なため、習えなかったそうです。社会の時間、配給制や切符制、言論の自由がない、当時の日本について習ったはずなのに、教科書で読むのと実際に話を聞くのとで、感じ方が違うのはなぜなのでしょう？

原爆が落ちた日のお話には息を呑みました。とても恐ろしい体験をしたのに、なぜあんなふうに話せるのだろうと、とても不思議に思いましたが、思い出したくない気持ちよりも、みんなに伝えたい、学んでほしい気持ちの方が強かったんだと思います。そう考えると、梶本さんは本当にすごい人だと思いました。

最後に、梶本さんは命を大切に、戦争を起こさないよう、声を上げたりして行動してほしいと仰っていました。

この3日間で、沢山のことを知り、沢山のことを学びました。それらを生かし、伝えながら、この3日間で生まれた、分からないことや、知りたいことについて、もっと学んでいこうと思います。